

氏名	カン 韓	エン 燕	レイ 麗
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)		
学位記番号	人 博 第 325 号		
学位授与の日付	平成 18 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
研究科・専攻	人間・環境学研究科 共生人間学専攻		
学位論文題目	ナショナル・シネマの彼方にて ——中国系移民の映画とナショナル・アイデンティティ——		
論文調査委員	(主 査) 教授 高橋義人 助教授 松田英男 助教授 プライアン ハヤシ マサル		

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は三部にわたり、中国系移民が製作した映画のテキストと各時代の言説分析を通じて、移民たちの多様なアイデンティティの形成・変容の過程を、歴史的・社会的なコンテキストの中に位置づけながら考察している。

第Ⅰ部では、トーキー移行期の1930年代初頭より始まる香港、およびアメリカ西海岸における中国系移民の映画製作の実態を明らかにしている。

トーキー期の到来に伴って初めて活況を呈するようになった香港の映画産業は、当時の中国政府機関によって行われた国語に関する映画検閲、さらに中国大陸に侵入してきた外敵に抵抗するために組織された「抗日民族統一戦線」などの要素と深く関わっていた。歴史と言語の共通性を利用して国民統合を図ろうとした当時の国民政府にとって、中国本土の南方各省まで広く配給された広東語映画は目障りな存在だったが、中国国内の市場に依存していた香港の映画産業は、活路を開くために、国民としての同質性を強調する「抗日救国」のメッセージを伝える広東語の「国防映画」を量産した。中国大陸より数多く製作された香港製の「国防映画」は、出身地によってさまざまな方言を話す中国系移民を、「中国国民」としての「南僑」アイデンティティに収斂させる役割を果たした。

一方、アメリカにおいても、トーキー移行期の1930年代初頭から中国系移民による広東語映画の製作が盛んに行われるようになった。従来ほとんど顧みられなかった在米中国移民の映画製作の実態および映画のテキストを、アメリカ国内における中国系移民の実際にあった動向と照らし合わせながら考察することによって、村落や県のレベルで連帯感を固めていた当時の在米中国系移民のあいだに、中日戦争の勃発とともに中国ナショナリズムが浸透していった過程が、映画に即してつまびらかにされている。

第Ⅰ部の考察では、1930年代初頭から海外で製作されはじめた中国語映画は、中国系移民の故郷 (native place) に対する忠誠を、祖国 (nation) への忠誠に変貌させ、華僑という名の下に中国国民としての自覚を植えつける役割を果たしたと結論づけられている。

第Ⅱ部では、香港とアメリカの二ヶ所における中国系移民の終戦後になってからの映画製作の実態が考察されている。

太平洋戦争後のアメリカで製作された中国語映画からは、自らの中国国民としてのアイデンティティを強調する要素が消え去るが、その主な原因は、太平洋戦争の同盟国である中国の出身者に対して帰化を認めたアメリカ政府の移民政策の転換にあると考えられる。一方、中国の内戦が終わった1950年以降の香港には中国各地より新たな移住者や難民の波が押し寄せ、共産党と国民党による別々の「中国政府」にそれぞれ帰属意識を持つ二種類の中国系移民が、競うようにして左右の相異なるイデオロギーを奉ずる映画を製作していた。

第Ⅱ部で考察した中国系移民による映画は、同じ時期に製作されたものでありながらも、異なる帰属意識を反映していた。終戦による国際政治の再編成によって大きく変動した社会的・経済的・政治的政策は、「華僑」として統一されはじめていた中国系移民の集团的帰属意識を異なる方向へと変容させていた。国家原理に基づく政府政策と市場経済に基づく利益とい

う二つの支配的な原理は、「中華民族」としての血縁をはるかに超えて映画のスタイル、さらには移民たちの帰属意識を左右するにいたった。

第Ⅲ部では、香港で製作された映画の分析を通して、香港にやってきた移民たちがかつて強く持っていた中国帰属意識が次第に薄れ、1960年代初頭からは「中国人」としてよりも「香港人」としてのアイデンティティが意識されるようになる過程が追跡されている。

1957年に東南アジア生まれの中国系移民が香港で電懣という映画会社を設立すると、それまでの香港映画業界を覆っていた政治的な重苦しさは一掃され、明快な経済原理から導き出された気軽で陽気な映画が量産されはじめた。まったく政治色を感じさせない、一見すると空疎で他愛もない夢物語である電懣映画のテキストを詳細に解説することによって、母国の存在を忘れようとする当時の移民たちの内心の葛藤が読み取られている。

1960年代初頭に、広東語と北京語がほぼ均等に話される映画が香港の銀幕に登場してきたが、本論文は、出身地の異なる中国系移民が<香港人>という新たなアイデンティティへと収斂されてゆくプロセスを、これらの映画から読み取っている。さらに、1990年代の香港で製作された広東語と北京語が混交した映画を、同時期に台湾で製作されたスタイルが類似する映画や1990年代の香港で製作された言語混交の映画と比較することによって、香港人のアイデンティティが決して均一で不変なものではなく、これからも緩やかに変化してゆくにちがいないと予想している。また第Ⅲ部の補論では、1960年代の日本の銀幕に登場する「香港人」の表象が分析され、戦後の日本映画における「香港人」の表象は戦時中の日本映画における「中国人」の表象と深い関連があると指摘されている。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、中国本土以外の場所に居住する中国系移民によって製作された中国語映画を研究対象としながら、映画史の側から中国近代史の一側面を明らかにした、きわめてすぐれた歴史社会学的研究である。

従来の映画史研究が国別や地域別になされた「縦軸」の研究であるとするれば、本論文は、これまで中国映画史、香港映画史、台湾映画史という縦割りの枠組みのなかで別々に研究されてきた広義での中国圏の歴史的な諸問題を「横軸」において捉え、映画の前に国名を冠した、いかなるナショナル・シネマの枠組みにも収まらないような映画に焦点を当て、緻密にして実証的な調査結果に基づく映像分析を具体的に進めながら、従来の「国民映画」研究では捉えきれなかった歴史的事実や経緯を見事に浮き彫りにしている。それによって従来の歴史学では見えなかった中国近代史の諸側面が、グローバルな視野、類例のない独特な視点から明らかにされている。

たとえば、1930年代の香港における広東語のトーキー映画の隆盛と、それに対する国家規制の問題を考察したくんだり、中華民国におけるナショナル・アイデンティティ形成の複雑な様相を解き明かしているばかりか、映画にどうしても付きまとうざるをえない文化帝国主義の問題が、ある種多言語社会であった中国においては国内問題であったことを見事な筆致で浮かび上がらせている。また戦後の香港における映画が、「香港映画」としてのアイデンティティを形成する過程を分析したくんだりでは、まず在米華僑の製作した映画の影響、次いで大陸からやってきた張善琨プロデューサーの率いる右派的新華の登場、そして新華と入れ替わりに勃興したキャセイ・フィルムの支配という「香港映画」の発展過程が、香港人のアイデンティティ形成とどのように重なっているかが仔細に分析されている。これらの映画をつくったのは、いずれも香港外の人によるものであり、これまで考えられてきた「香港映画」なるものが、じつは後世の研究者によって神話化されたものであることを解き明かした手腕は見事というほかない。その歴史的転換を象徴する作品の仔細なテキスト分析も説得力に富む。さらには、1930年代初頭から始まる在米中国系移民によって製作された広東語映画が多くの一次資料に基づいて調査され、その分析の結果から今まで疑われてこなかった映画史におけるいくつかの定説が見事に覆されている。また、戦前の上海で活躍した張善琨の功罪を分析し、戦後香港に移った彼が日本との合作映画を作った理由が、単に日中の映画の戦後処理の問題や技術の習得のみならず、台湾での市場を意識したものであったことを明らかにしている。東宝とキャセイの合作映画における戦後処理の問題はよく知られているが、申請者は、補論においてこの問題にもきちんと触れることを忘れてはいない。日本で学ぶ中国人である申請者は、中国人という立場、日本で学ぶという地理的な条件をともに生かし、中国本土、香港、台湾、日本、アメリカの資料を仔細に検討することによって、特定の地域に縛られた人々にはできない仕事をなしと

げている。

映画は芸術作品である同時に、特定の社会的な力関係のなかで作られた生産物でもある。後者に着目した本論文は、中国系移民によって製作された映画を、映画監督が制作した作家の芸術作品として検討するのではなく、映画をより歴史的なコンテキストの中に位置づけようとしている。さらに、歴史における事件と事件との因果的連鎖だけを追求して満足するのではなく、移民たちによって製作された映画テキストそのものに注目し、それによって、従来の歴史学や人類学では究明できなかった中国系移民の複雑な心性を探りあてようとしている。中国系移民の心性をテキストに即して分析するミクロな視点と、作品を当時の社会・文化のなかの関係性の一つとして分析するマクロな視点の両方を含んだ論述は、まことに生き生きとしたダイナミックなものとなっている。

このように、映画史の流れと具体的な映画分析という二つの位相から考察を行っているからこそ、本論文は、1960年代までの激動の半世紀における中国語映画史の全体図を、脱国民映画の視点から再構築することができたのであろう。さらには、ドメスティックな枠内に閉ざされない多面的な視点から論を進めているため、従来の国別や地域別の映画研究と同じ映画作品を分析の対象に取り上げた場合でも、映画史における定説を覆すような結論を数多く導くことができたものと思われる。イデオロギーの束縛によって、偏って論じられてきたナショナル・シネマの問題に再検討を促した、まことにすぐれた論考である。

このような性格を備えた本学位申請論文は、人間と社会との関係の考察をめざして創設された共生人間学専攻 人間社会論講座にふさわしい内容を有したものと言える。

よって

本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年2月7日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。